

踊りは、無数の無名の人の 無償の行いから生まれたと思うんです。

70年代から独自のスタンスで活動を続け、近年は、敏捷な運動能力と孤高のたたくまいで、

映像の世界からもオファーが相次いでいるダンサー、田中泯。今年のGWに開催されたタクト・フェスティバルでは、

芸劇前の広場にソロダンス「場踊り」で参加、道行く人の喝采を浴びた。

11月に久々の劇場作品となる『一オドリに惚れちゃって!—「形の冒険」』を控える田中泯。

奇しくも、野田秀樹と同じ日に同じ空を見上げていたことがわかって—。

1964年の同じ青空、それぞれの風景

正式に会うのはこの日が初めて。とはいえ、田中さんはNODA・MAPの公演に度々足を運び、野田もまた、田中さんの活動には昔から敬意を抱いていた。NODA・MAP常連の宮沢りえさんが、田中さん演出、出演のダンス&トークパフォーマンス『影向』(2015年)でダンサーデビューした縁もある。そして身体表現を選んだふたりには、意外な共通の体験があった。

野田 残念ながら僕は観られなかったのですが、ゴールデンウィークに芸劇前の広場でなされた『場踊り』(TACT/FESTIVAL2018)が好評だったと聞いています。池袋の雰囲気はいかがでしたか？

田中 僕が最初に踊りを始めたのは、バレエとアメリカのモダンダンスだったんです。昔は内弟子という制度があり、先生の家の掃除や洗濯をしながら、いわゆる授業料を免除してもらって教わっていた。とにかく早く覚えたくて、スタジオに寝泊まりして、子供のレッスンにも参加して、時々師匠の時間が空いてる時に直に教わりましたね。その場所が池袋に繋がるんですけど(笑)、池袋駅から東武東上線で行く常盤台だったんです。だから懐かしかったですよ。

野田 お師匠さんはどなたですか？

田中 平岡斗南夫といまして、日本の舞踊の世界では初期の男性の舞手です。本当はオペラ歌手になるつもりで鹿児島から出て来たんですけど、帝劇でバレエを習わされて、そのうちモダンバレエを始めた人です。

野田 そもそも、泯さんが踊りを始められた動機は？

田中 バスケをずっとやっていて、その世界で上のほうを目指していたんです。でも大学に入って、他の選手との間に能力の差があると知りまして。と同時に、スポーツ界のピラミッドの様子とか、リタイアしたあとにどういう生き方があるかといった情報がバーツと入って来たんです。それで、上に進めたとしても、まるでトロロクに乗せられたみたいじゃないかと感じてしまっただけで、自分自身にしかできないことをやるよ、「芸術家になろう!」と考えたんです。それを決意した日のことはよく覚えています。東京オリンピックの開幕式で、空に飛行機が五輪をつかったのを見てはっきり、「俺はもう永久にスポー

ツやらないぞ、という気持ちが湧き上がったんですね。

野田 64年の開会式の時ですね。僕も見ています。自衛隊の飛行機が五色の煙を出しながらアクロバット飛行でオリンピックのマークをつくった。

田中 そうです。あれ、相当な数の人が空を見ていたでしょうね。

野田 おいくつでしたか？

田中 19です。ちょうど大学に入った年でした。

野田 僕は8歳でしたけど、あの空の青さを鮮明に覚えてます。当時、参宮橋に住んでいたんですが、開会式をテレビで見ていたら空に五輪が描かれる様子を放送している。外なら実際に見るだろうと家を出たら、(開会式をやっている)国立競技場のすぐ近くだから、完璧に自分の真上で「おー」と思っただけで、坂口安吾の小説をもとにした作品(『眞作桜の森の満開の下』)の稽古をしているんですけど、僕が安吾を好きな理由のひとつに、彼の書く青空が大好きだということがあります。戦後の虚無のどこまでも青い青空というんでしょうか。そのイメージが重なります。僕にとって、青空という浮かぶのはあの青空なんです。

田中 踊りはもう習い始めていたんですけど、僕も高いところでオリンピックの輪が描かれていくのを見て、なぜか腹が決まりました。

ダンスと演劇、その距離感と問題意識

前回の東京オリンピックの開会式の日、同じ空を眺め、踊りに人生を賭けることを決めた青年と、後に強く影響を受ける作家の世界観に通じる入口を見つけた少年。ジャンルは異なるが、共にパフォーマーの道を選んだふたりは、ダンスと演劇の距離感について、今、近い問題意識を抱いている。

田中 11月に芸劇でかなり久しぶりにソロの劇場公演をするんですけど、劇場を離れての理由は、踊りと演技の違いを自分なりに考えていたからです。俳優さんと同じように体を使うし、かなり近いと思われがちなんだけど、演技と踊りは発生の時期も背景も全く違うんじゃないかと僕は思っています。その距離を考えていました。誰が始めた、いつ始まったということではなく、踊りというのは無数の無名の群れから発生して、そのままずっと続いて

HIDEKI NODA
野田秀樹

MIN TANAKA
田中泯



いるものだと僕は思う。人が文字を使い始める以前から踊りはあって、たまたまそれを「踊り」と呼ぶようになり、のちにそれが文字になっていったわけだ。……学者は誰もそう言っていないんですが、最近、踊りながら喋るダンサーさんが多くなりましたよね。踊っていて声が出るのはわかるんですけど、「ハッ」とか「ウッ」という音としての肉声は自然に出るのは。でもそれが意味を持った言葉になった時に僕は違和感を感じる。なぜ踊っている人が喋るのかを問いたくなるんです。

野田 僕もよく踊りと演技について考えるんですが、最近、踊りながら喋るダンサーさんが多くなりましたよね。踊っていて声が出るのはわかるんですけど、「ハッ」とか「ウッ」という音としての肉声は自然に出るのは。でもそれが意味を持った言葉になった時に僕は違和感を感じる。なぜ踊っている人が喋るのかを問いたくなるんです。

田中 野田さん！僕はその話を何よりもしたい。ただこれ、相当真剣に話さないといけないテーマですよ。中途半端に話すともったいない話です。

野田 あ、そうでしたか(笑)。

田中 たとえばジャンプという動作を、学者たちは“地盤を鎮めるための足踏み”と言ったりしますが、僕は違うと思う。もっともっと素朴な、体の奥のほうから自然に生まれて来た行為だと思うんですね。人間の脳は何十万年かけて発達してきた。それより先に踊りの衝動があったんじゃないか。ダンスは本当にすごいことをやってきたんです。それも無数の無名の人の無償の行いによって。そこが、ひょっとしたら演劇との大きな違いかもしれないと思っています。でもある時期からダンスは宗教に奉仕し、また演劇に奉仕するようになるんです。アメリカのミュージカルは特にその傾向が強い。ダンスは演劇に奉仕しながら、技術を開発していくんです。最近の喋るダンスというのは、それと無関係ではないんじゃないですか。

野田 混さんがおっしゃることと一致しているかわかりませんが、僕が違

和感を感じるのは、ダンサーがわざわざインカム(マイク)を着けて喋ることなんです。ダンスは本来、肉体のものじゃないですか。声を出すのは構わないし、何か喋ってもいい。でもなぜ言葉や肉声ではなく、当たり前のように機械を通して外に出すのが不思議です。演劇とダンスの違いは、そこにもあると思うんですよ。僕ら(俳優)は、肉声をせりふにして、意味のあるものとして喋る。その時、言語は伝達しなくちゃいけないものとして意識されるから、肉体をどうコントロールして、その一部の声をどう使ってお客さんに伝えるかを考えるわけです。それなのに(言葉よりも)肉体を駆使することを選んでるダンサーが、何か考えた形跡もなくインカムに頼っているのは違和感があります。「こだけ機械に頼っちゃうんだ?」。この10年くらいですかね、気になるようになってきたのは。

田中 人間が言語を獲得する前、本当に意味を伝え得る音声を持たなかった時代には、叫び声ひとつでさまざまなニュアンスを伝えなければいけなかった。例えば危機に瀕している状況とか、相手との距離の問題といったことです。これは僕から言わせれば、非常にダンス的なんですよ。相手との距離で声の出し方は絶対に違う、その身体感覚から出てくる声は、言ってみれば肉体の資源です。僕はそういうことを想像するだけで豊かな気持ちになれます。野田さんが言う、ダンサーが安易に言葉を使う良くない流れは、ピナ・バウシュが広めてしまったんじゃないか!?

野田 ピナ・バウシュが原因ですか(笑)。

田中 だって彼女、「ダンスシアター(タンツァテアター)」という言葉で、ダンスとシアター(演劇)を簡単につなげてしまったんですから。それが何の議論もされないうちに広まってきた。僕は逆なんです。さっきも言ったように、ダンスとシアターの違いをずっと考えている。僕も時々、踊りながら言葉を出すことはあるんですが、進行しているものとは全く別のレベルの次元の言葉を使いたい。だから「あ、白鳥が北へ飛んでく」とか言うんですよ。別に何の意味もないんです。ただ、白鳥が北へ飛んでいくということが、お客さんにはきちんと聞こえて、まるで僕とは関係ないようにして存在している。そこにおもしろさを感じます。

野田 僕が最初に喋るダンスを観たのは、確か、ウィリアム・フォーサイスの作品でした。

田中 あの人にも責任はありますね(笑)。結局、技術と技術をつなげたり、ここにあるものと別のところにあるものを組み合わせるとダンスになるというふうな、いつの間になくなってしまいましたね。よくよく考えると変でしょう。演劇には、技術以前の(感情や感覚の)高まりがあるわけですよね。そこからしか考えられないじゃないですか。踊りだって本当は、踊りをつくる人が常に「踊りって何だろう?」という問いを持續していなかったら、踊り足り得ないはずなんです。「こうすりや踊りになる」というのは一番ずい考え方だと僕は思います。

野田 演劇だっていくらでもありますよ、「こうすりや演劇になる」という考えでつくられたものが、自分の反省を含めて言いますけど、やっぱり「これとこれを組み合わせればそれらしいものになる」とつくられたであろうものを観

ると「芝居を舐めるなよ」と思いますよね。

田中 いくら時間をかけて大ピースの作品をつくったと言われても「こういう表現をすれば、観る人はこう思ってくれるだろう」とみたいな予定調和に向かったものなら、怠慢もいいところですよ。11月の新作は、珍しく最初にタイトルを付けようと思って『形の冒険』にしたんですけど、形は絶対に必要なものですが、動きが形に至った時に、その形を揺るものがあるだろう、それが僕であり踊りであり演劇なんじゃないかと思うんですね。伝統は形だと言われますけど、実は、その形を揺らすこと自体が伝統なんだろうと。そうして伝統は続いて来た。その意味ではダンスも全く同じで、もしかしたら大それたタイトルをつけてしまったのかも知れないと困っているところです(笑)。

野田 良いタイトルだと思います。公演を楽しみにしていますし、ぜひその前に、僕らの『廣作 桜の森の満開の下』を観にいらしてください。

田中さんが「何よりも話したい」と言った肉体と声、ダンスと演劇の関係についてふたりがさらに語り合ったらどんな刺激的話が広がるのか。想像するだけでも心が躍るその機会をひそかに待ちたい。

取材・文：徳永京子
写真：渡部孝弘



今回のアイタイヒト

田中 浜 MIN TANAKA

ダンサー、舞臺舞踏の創始者である土方巽に私淑した、前衛的、実験的舞臺家。1974年、独自の表現活動を始め、精神・物理的統合体として存在する身体に重点をおいた「ハイパーダンス」を展開。78年のパリでのソロデビュー以後、世界中の演劇人や芸術家との数々のコラボレーションへと繋がりが、そのアプローチは形式的な舞臺芸術、ダンス、音楽のシーンの枠に収まらず、2002年、山田洋次監督の映画「たそがれ清兵衛」で初の映画出演により、その後も国内のみならず数々の映画、TVドラマへ出演し、2013年にはハリウッドデビューを果たす。田中の、「踊りの起源」への地盤固めという形で、より実践への根を深めている。「踊り」は日本および世界各地で現在進行形に広げられている。国内外問わず大舞台から野外までの幅広いダンス歴は現在までに3000回を超える。著書『僕はずっと裸だった』(工作舎)、「意身伝心」(松岡理恵の著、春秋社)、写真集『完全色』MIN by KEIICHI TAHARA(スーパードット)。
www.min-tanaka.com

作・演出：野田秀樹
NODA・MAP第22回公演
「廣作 桜の森の満開の下」
11月3日(土・祝)～25日(日)プレイハウス
9月28日(金)～10月3日(水)国立シヤイヨ一劇場(パリ)
大阪、北九州公演あり
www.nodamap.com/

関連ページP11

シネマ歌舞伎『野田版 桜の森の満開の下』

作・演出：野田秀樹
2019年4月5日(金)～ 東劇ほかにて全国公開
東京芸術劇場ボックスオフィスにてムビチケ販売!(11月3日～販売開始)

野田 秀樹 HIDEKI NODA

劇作家・演出家・役者。東京芸術劇場芸術監督、多摩美術大学教授。92年に「劇団 夢の遊戯社」を解散後、ロンドンへ留学。帰国後の93年に演劇企画製作会社「NODA・MAP」を設立。以来『キル』『赤鬼』『パンドラの籠』『THE BEE』『アキヤラクター』『エグザム』『MWA』『足跡』『One Green Bottle』など、時代を超え身体を穿つ劇作を発表。モーツァルト・歌劇『フィガロの結婚』-監督は長谷川一将、オペラの演出、海外の俳優やスタッフとの共同制作。2017年は5年ぶりとなる、『野田版 桜の森の満開の下』で歌舞伎の脚本、演出を手がけ、大きな反響を得る。演劇界の旗手として格を越えた魅力的な創作活動を行う。2015年よりブラジル、東北、東京、京都などで、国内外の多種多様な表現者達と新たな幻想的な表現を創出する文化ハウス「東京キヤラクター」を実施。2017年、十八代目中村春三郎とのタッグが話題となった伝説的作品『表に出ない』を、『THE BEE』の最強キャストとともに、新たな英国版『One Green Bottle』として創作。東京、韓国、ロンドン、ルーマニアで上演し、好評を博す。2018年9月～11月、NODA・MAP第22回公演「廣作 桜の森の満開の下」を東京、大阪、北九州、パリで上演。世界を駆け回り、意欲的に活動を展開している。

野田秀樹芸術監督10年目の新たな取組み
東京演劇道場 オーディション/ワークショップ
www.geigeki.jp/engekidojo

関連ページP16

芸術dance
田中 浜
一オドリに惚れちゃって!ー「形の冒険」
11月23日(金・祝)～25日(日)シアターイースト

関連ページP7、P12

MIN TANAKA X HIDEKI NODA